

情報の伝達 —体験してみよう—

富山県立高岡西高等学校 上田 幸男

1 はじめに

学習指導要領の「情報通信ネットワークとコミュニケーション」では、コミュニケーション手段の発達をねらいの1つとしている。当然、教科書にその内容が記載されているが、簡単な表記でしかない。実際に記載されている内容を読むだけでは、コミュニケーション手段の発達の苦労さが伝わらない。そこで、授業の導入部分で生徒が様々なコミュニケーション手段を体験すれば、現在の情報ネットワークの利便性を感じることができると感じる。また、授業で取り組むことが不可能なら、指導者が体験することで真実みがある授業になると信じる。

2 体験内容

(1) ジェスチャーで伝える。

教員がポーズを取り、それが何を表現しているか生徒に当てさせる。

(2) 音で伝える

①人は年齢によって可聴範囲が異なることの確認

フリーソフト「可聴周波数域チェッカ(mamimichk)」を利用し、可聴範囲を確認する。

②意識によって、感じ方が異なる。

図形を言葉で表現し、それが何を示しているかを当てさせる。

(3) 手旗信号で伝える

手旗信号を行い、それが何を示してい

るかを当てさせる。

(4) モールス符号

フリーソフト「モールス符号の書き取り受診練習ソフト(A1A Breaker)」を利用し、モールス符号を聞き取り、何を表しているかを当てさせる。

3 まとめ

実際に体験すると、昔のコミュニケーション手段が、如何に大変であるかを実感できる。それに対し、現在のコミュニケーション手段が昔と比べ簡単であり、より正しく情報を伝えることが可能であることが分かる。また次の段階として、現在のコミュニケーション手段の特性を KJ 法によってまとめ(グループワーキング)、発表すれば(相互理解)、アクティブラーニングにも繋がる。このように、教科書に記載されていることを、可能な限り実際に体験させるアナログ的なことも、デジタルを教える情報教育においても必要であると考える。

参考文献

高等学校学習指導要領解説 情報編

参考 URL

<http://masudayoshihiro.jp/>

<http://polar-stars.com/>

<http://www.vector.co.jp/soft/win95/home/se359994.html>